

世界文学全集 45

フォークナー
八月の光

河出書房

世界文学全集 45 フォークナー



© 1969

編集委員

阿部 知二 伊藤 整
桑原 武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和 36 年 7 月 25 日 初版発行

昭和 44 年 3 月 1 日 16版発行

定価 430円

訳	者	高 橋 正 雄
発 行	者	中 島 隆 之
印 刷	者	草 刈 龍 平
装	幀	原 弘
印 製		刷・中央精版印刷 株式会社 本・中央精版印刷 株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

八月の光……………一

年 譜……………四三九

解 説……………(大橋吉之輔)四四九

八
月
の
光

主要人物

リーナ・グローヴ 貧乏白人の娘で、出産間近かな腹をかかえて、自分を捨てて行った男のあとを追って、アラバマ州からはるばるミシシッピー州のジェファソンまでやってくる。

バイロン・パンチ ジェファソンの製材工場で働いている真面目なキリスト教徒だが、リーナを一目見て彼女を恋し、以後彼女の面倒を見る。リーナとバイロンの物語はあすへの希望に生きる明るい喜劇的世界で、この小説の一つのサブ・プロットをなす。

ゲール・ハイタワール 妻の不品行のためにジェファソンの教会を追われた牧師だが、彼は南北戦争で戦死した祖父の姿に取りつかれて、そのために破滅して行く。彼はバイロンの相談相手として批判者の立場でこの物語に登場するが、彼の話はこの小説の第二のサブ・プロットをなす。

ジョー・クリスマス この小説の主人公。黒人の血を引く孤児として人種的偏見にとらわれた南部に育ち、やがて狂信的な長老教会派の信者の養子として宗教的偏

見に痛めつけられた彼には、生きることが反逆することとなり、殺人、強姦といった暴力をふるったあと、捕えられて虐殺される。この陰惨な悲劇的物語が、この小説のメイン・プロットをなす。

ルーカス・バーチ リーナをはらませて捨てて来たらくでなしで、賞金ほしさにクリスマスの殺人を密告する。ドック・ハインズ クリスマスの祖父で、自身を神の手先と信じ、クリスマスにつきまとい神の意志の行なわれるのを監視する狂信者。

サイモン・マックイーチャン 狂信的な長老教会派の信者で、クリスマスを孤児院から引きとって育てるが、やがてクリスマスに殺される。

ジョアナ・バードウン 北部ニュー・ハンプシャー出身の一家のジェファソンにおける唯一人の生き残りで、奴隷制度廃止論者として町の人々から憎まれている。ある夜彼女の家にしのび込んだクリスマスを自分の小屋にすまわせ、彼と肉体関係を結ぶようになるが、最後にクリスマスに殺される。

パーシー・グリム 軍国主義かぶれの青年で、クリスマスを虐殺する。

一

道のはしに腰をおろし、こっちに向かって丘をのぼって来る荷馬車を見やりながら、リーナは考える、『あたしはアラバマ州からやってきたんだわ、ずいぶん遠くアラバマ州からずっと歩いて。ずいぶん遠くきたもんだわ』そして考えつづける。旅ニ出テカラマダ一月ニモナラナイッテイウノニ、モウミシシッピー州ニキテルンダワ、コレマデ一度モキタコトノナイホド遠クニ。アタシハ十二ノ時カラドーンノ工場デ暮ラシテキタンダケド、ソコカラコンナニ遠ク離レタコトハ一度モナイワ

彼女はそのドーンの製材工場へさえ、父母が死ぬまで行ったことがなかった。もっとも一年に六度や七度は、土曜日に郵便で注文した服をき、素足の足を荷馬車の床にべったりつけて、靴は紙にくるんで自分のわきにおいたまま、荷馬車に乗って町へ出かけることがあるにはあったが。そうしたとき、リーナはいつも、馬車が町にくる直前に、靴をはくのだった。また大きくなってから

は、町はずれまでくると、彼女は父に馬車をとめてくれたのみ、そこから馬車をおりて歩いて行くことにした。リーナは自分がなぜ馬車に乗らずに歩いて行きたいと思うのか、父に語ろうとはしなかった。父のほうでは、それはつるつるした通りを、歩道を、歩きたいのだと思っていた。だが実のところは、歩いて行けば、自分を見たり、自分と行きちがつたりする人たちが、自分のことを町の人間と思いきむだろうと、彼女が信じていたためだったのだ。

リーナが十二歳のとき、父と母が同じ夏に、三つの部屋と一つの廊下が仕切りもなしにならんだ丸太小屋の、虫の飛びかっている石油ランプのともった部屋で死んだのだが、その部屋のむき出しの床は、素足にふまれて古銀貨のようにつるつるにすり減っていた。彼女は今生きている子供のなかでは一ばん年下だった。母のほうに先に死んだのだが、そのとき母は、「とうちゃんを大事にするんだよ」といった。リーナはそのとおりにした。するとある日父が、「ドーンの工場へ、マッキンリーといっしょに行くんだ。出かける用意をしときな。やつがやってきたらすぐ行けるようにな」といった。それから父が死んだ。兄のマッキンリーが荷馬車でやってきた。二人はある日の午後、父を田舎の教会の裏手にあった林のなかに埋めて、松の木の墓標をたてた。その翌朝、マッキ

ソリーの荷馬車に乗って、リーナはドーンの製材工場に向けて故郷に永遠の別れを告げたのだが、そのときの彼女は、これが故郷との永遠の別れになるとは、知らなかったかもしれない。その荷馬車は人から借りたもので、兄はそれを日暮れまでに返す約束をしてきたのだった。

兄はその工場で働いていた。村じゅうの者がその工場のなかか、さもなくば工場の用をして働いていた。工場は松の伐採をやっていた。それができてすでに七年たっていたが、さらに七年たったら、その周囲の木を全部切りたおしてしまふだろうと考えられていた。そうしたら、機械のいくつかと、その機械を動かす、そのおかげで、またそのために生きてきた人々のほとんどが、貨車につみこまれて立ち去っていくことだろう。だが、機械のあるものはそのままに残されるだろう、なぜなら新しいのがいつでも月賦で買うことができるだろうから——そしてやつれた、じっと目を見張っている、動かぬ車輪のいくつかが、ぼうぼうに雑草の生えたれんが屑の山から、なんとなくぞーっとさせるような感じで姿をあらわし、また中のからっぽのボイラーからは、錆びた、煙を吐くことのない煙突が頑固そうに、だがあたり深く静まりかえった、荒涼たる切り株だらけの光景に面くらってぼんやりしているふうに、つつ立っていることだろう。そして、鋤のあとの見られぬ、耕されていない

荒涼たる光景は、秋の長い静かな雨季のあいだや、騒々しく駆けてくる春分のあいだに、しだいしだいに穴をえぐられて、赤味がかった、先のふさがった、いくつもの峡谷に変わってゆくことだろう。そうになると、その最盛期にさえ郵政省の年鑑にその名ののっていないこの村は、工場の建物をこわして、それを炊事や暖房用に燃やしている、痩せほそった非公式の後継者たちにさえも、忘れられてしまうことだろう。

リーナがそこにやってきたとき、そこにはたぶん五軒の家があった。そこには一本の線路と駅とがあり、一日に一回、客車と貨車の混合列車が汽笛をならしながら通り過ぎて行くのだった。汽車は赤い旗をかがげると止めることができたが、それはたいいお化けのようなとうとつさで、妖魔パンシーのような泣き声をあげて、荒れはてた丘のあいだから姿をあらわしては、まるで切れた紐からこぼれた、忘れられた数珠玉のような、村ともいえないようなこの小さな村を横切って通り過ぎて行くのだった。兄はリーナよりも二十歳も年上だった。彼女は兄といっしょに住むようになるまで、兄のことはほとんど忘れていた。兄は四部屋の、ペンキの塗ってない家に、お産と子供の苦勞ですっかりやつれた妻といっしょに住んでいた。毎年ほとんど半分は、義姉は産褥にあるか、産後の回復期にあった。この間リーナは、家事の一

切をやり、ほかの子供たちの面倒をみた。あとになって、彼女は自分にこんなふうになった。『あたしにこんなに早く子供ができたのも、たぶん、そのためだったんだわ』

リーナは家の裏手にあった差掛け小屋で寝ていた。その小屋には窓が一つあったが、彼女はそれを暗やみのなかで音をたてずに開けたり閉めたりできるようになった。そこには彼女といっしょに、最初は一ぼん上の甥が、つぎには上の二人の甥が、そのつぎには上の三人が、寝ていたのであるが。彼女ははじめてその窓を開けるまでに、そこに八年間も住んでいた。そして、それを十二回と開けないうちに、それを一度も開けなければよかったと気づいたのである。だが、彼女は自分にこうだったのだ。

『でも、それもこれも、あたしのまわり合わせなんだわ』義姉が兄に話した。そこではじめて、兄はリーナのからだの変化に目をとめたのだが、兄としてはもっと早く気づいてしかるべきだったのだ。兄は冷酷な男だった。やさしさとか上品さとか若さとかいうものは（彼はちょうど四十歳だった）、彼からすっかり取り取られ、あるのはただ一種の頑固で自棄的な不撓不屈の精神と親代々きびしくうけつがれてきた血統にたいする誇りだけだった。兄はリーナのことを淫売婦とよんだ。そして、まさしく相手の男を言い当てて責め立てたが（若い独身者

か、それとも、とにかく中身はからっぽだが、カサノヅメ気取りの好色漢の数は、家の数よりもっと少なかったのだ）、リーナはその男が半年も前に村を立ち去っていたのに、それを認めようとはしなかった。彼女は頑固に、「あの人はあたしを呼んでくれるわ。あの人はあたしを呼んでくれるって、いってたわ」とくり返すだけだった。彼女はいささかもひるむことなく、まるで羊のように、大事にしまわれた、忍耐強い、堅固な誠実にすがっていたのだが、そうした誠実こそ、ルーカス・バーチのような人間が、よしんばその必要が生じてさえ姿を現わすつもりはなくとも、頼りにし、当てにしているものである。それから二週間後に、リーナはふたたび窓を乗り越えて抜け出して行った。このときは、乗り越えるのが少々苦しかった。『もし最初からこんなに苦しかったら、今こんなことをやらずにすんだだろうに』と彼女は思った。彼女はやろうと思えば、昼日なか、ドアを通り抜けて大つばらに出て行くことができたであろう。そうしたとしても、だれひとり彼女を引きとめるものはなかったらう。彼女もたぶん、それは知っていた。だが彼女は夜窓からこっそり出て行くことにしたのである。リーナはしゅろの葉のうちわと、さらさら染めのハンケチにきれいにつつんだ小さな包みを持って行った。その包みには、ほかのいろいろな物にまざって、五セント玉と

十セント玉で三十五セントの金がいっていった。彼女の靴はもとは兄のもので、兄がそれを彼女にくれたのだった。それはまだほとんどいたんでいなかった。というのも、夏のうちは二人のどちらも、ぜんぜんそれをはかなかったからである。彼女は足の下に道のほこりを感じると、靴をぬいで手にさげて行った。

リーナはもうほとんど四週間も、こんなふうにして旅行をつづけてきたのだった。彼女のすごしてきた四週間というものは、ただ遠いという感じをおこさせるだけで、それは衰えることのない静かな信念でもって舗装され、親切な名も知らぬ人々の顔と声のむらがつている、平和な廊下のように思えた。ナニ、ルーカス・バーチ？ 知ラネエナ。ソナ名前前ノ男ハコノ辺ジャア聞イタコトガネエヨ。コノ道カイ？ コレハボカホンタス（アーカン^州の町）ヘ行ク道ダナ。ソノ人ハソコニイルカモシレネエナ。タブンナ。ソノ途中マデ行ク荷馬車ガココニアルダヨ。ソレニ乗ッケテモラエバ途中マデ行ケルダヨ。そしていま彼女のうしろには、昼から夜へ、夜から昼へと平和に^{たんと}思々くり返される長い単調な変化のつらなりがくりひろげられるのであり、そして彼女はそのつらなりの中を、まるで車輪をきしませ、しなやかな耳をした神の化身の行列の中を通ってでも行くように、どれもこれも同じような、だれのものとも知れない、ゆっくりした荷

馬車に乗って、永遠に動きながら、いっこうに進むことのない甕^{かめ}に焼きつけられたなにかの姿のように、進んできたのだった。

荷馬車はリーナのほうに向かって丘を登ってくる。彼女はこの道を約一マイルほどもどったところで、その馬車を通り越してきたのだった。それは道端におかれてあり、らば、たちはうっとりと眠っているみたいで、その首は彼女が歩いて行く方向に向けられていた。リーナはその馬車に目をくれ、それから垣根のむこうの厩^{うまや}のわきにしゃがんでいる二人の男に目をくれた。彼女はただ一度、ひと目ですべてを収める、すばやい、無邪気でいて意味深そうな一瞥^{ひとみ}で、馬車と男を見たのだった。彼女は立ちどまらず、そして垣根のむこうの二人の男は、彼女が馬車と自分たちに目をくれたのに、気づかないらしかった。彼女のほうでも二度とふり返らなかつた。彼女は靴の紐が足首のところまでかけているのをそのままにして、ゆっくりと歩きつづけて姿を消し、ついに一マイル先の丘の頂上に行きついたのだった。それから溝^{みぞ}のふちに腰をおろして、足を浅い溝の中に投げ出すと、靴をぬいだ。と、しばらくして、荷馬車の音が聞こえてきたのだ。リーナはしばらくその音を聞いていた。すると、丘を登ってくる荷馬車の姿が見えはじめたのである。

使い古した、油の切れた木と金属の、するどい、いま

にもこわれそうながらごろい音音が、ゆっくりではあるが、すさまじく聞こえてくる。ひからびて、のろのろと鳴りつづけるその音は、八月の午後の暑く静かな香ばしい静寂の中を、半マイルも先から聞こえてくる。らばたちは決してさめそうもなく、居眠りしているような様子で歩いているが、車のほうはいっこうに前進しているようには思えない。それは道の途中で、永久に宙ぶらりんにぶら下がっているように思える。それほどに、その前進は遅々としており、まるで、ほんのり赤く色づいた道という紐の上の、みすぼらしいひと粒の数珠玉みたいなのである。それはまさしくそんなふうなので、それを眺めていると、視覚も感覚もうとうとほやけ、道そのものと同じように、すではかられた糸が糸巻きにふたたび巻きもどされるような、夜と昼のあいだの平和で単調な変化のすべてと混じり合ってしまったて、目は馬車の姿を見失ってしまうのだ。そこでついには、その音までが、距離感さえもない、まったく取るにたらぬどこかの場所から聞こえてでもくるかのように、ゆっくりとした、ぞっとするような、意味のないものに思えてき、それはまるで自分の姿より半マイルも先を動いている幽霊みたいなのである。『目に見えないこんな先から、音だけが聞こえてくるわ』とリーナは考える。彼女はふたたび荷馬車に乗って、すでに動きだしている自分を思い浮かべな

がら、考えつづける。ダトスレバ、アタシハ馬車ニ乗ラナイウチニ、馬車ガアタシノ待ッテイルトコロマデコナイウチニ、スデニ半マイルモ乗ッテイルミタイダシ、ソレカラ馬車ガアタシヲオロシテカラモ、マダ半マイルハアタシヲ乗セテ動イテ行クコトニナルダロウ。彼女はもはや馬車を見ようとせすに、ただ待っており、そのあいだ思考は取りとめなく、忙しそうに、よどみなく流れつづけ、名も知らぬ親切な顔や声でいっぱいになる。ナニ、ルーカス・バーチダッテ？ オマエサンハボカホンタスデ探シテミタンダッテ？ コノ道カイ？ コレハスプリングヴェールヘ行ク道サ。ココデ待ッテイルガイイ。モウジキ馬車ガ通リカカルダロウカラ、ソレニ乗リヤア、ソレガ行クトコロマデツレテモラエルダロウヨ。そしてさらに考える、『もしもあそこへくる車がまっすぐジェフアソンまで行くとしたら、あたしはルーカス・バーチがあたしの姿を見ない先に音だけを耳にするところまで、乗って行くことになるだろう。ルーカスは荷馬車の音を耳にするだろうが、それがどんな馬車か彼にはわかるまい。だから、ルーカスが目で見ない先に、一つのものが彼の耳に聞こえるところにあることになる。そしてそのつぎに、あたしを見てびっくり仰天するだろう。だからルーカスが思い出さない先に、二つのものが彼の目に見えるところにあることになるだろう』

アームスティッドとウインターボタムが、ウインターボタムの厩うまやの日かげになった壁によりかかってしゃがんでいたとき、二人はリーナが道を通って行くのを見た。二人はひと目で、彼女が若く、身重で、ついぞ見かけたことのない顔なのに気づいた。「あの娘っ子は、どこであんな腹になったのかなあ」とウインターボタムがいった。

「あの腹をして、どこから歩いてきたんだか」とアームスティッドがいった。

「きつと、この道の下しもにいるだれかを訪ねて行くんだらうよ」とウインターボタムがいった。

「そうじゃあるめえ。もしそうなら、おらの耳にも噂うわさがはいってるはずだもんな。それから、おらの家の近所のものでもなさそうだ。もしそうなら、それだって、おらの耳にはいってるはずだもん」

「だけれど、あの娘にやあ自分の訪ね先が、ちゃんとわかってるにちげえねえだよ」とウインターボタムがいった。「あの歩きっぷりからしても、そうとは思えねえ」

「とにかく、そう遠くまで行かねえうちに、道づれができるだらうよ」とアームスティッドがいった。娘はゆっくりと、その大きくふくれた、だれが見てもそうとわか

る腹をかかえて、歩いて行った。二人のうちのどちらも、その娘があせた青色の形のくずれた服をきて、しゅろの葉のうちわと小さなふるしき包みをもって通りすぎるとき、自分たちのほうにちらっと目をくれたことにさえ、気づかなかった。「あの娘はこの近所から来たんじゃない」とアームスティッドがいった。「あんなに急いで歩いているところを見ると、どうやら、もうずいぶん長いこと旅をしているが、まだまだだいぶ遠くまで行かなきゃあならねえようだもんな」

「いや、あの娘はどっかこの辺のものを訪ねて行くにちげえねえよ」とウインターボタムがいった。

「もしそうなら、おらの耳にもその噂うわさがはいってるはずだな」とアームスティッドがいった。娘はどんどん歩きつづけた。彼女はふり返らなかった。そして、やがて道の上手かたに姿を消した。大きな腹をかかえて、ゆっくりと、慎重に、急ぐことなく、疲れを知らず、まるで傾きつつある午後の日の歩みのような足取りで。彼女は二人の話からも、またおそらく二人の心のうちからも、姿を消してしまっただけだった。なぜなら、まもなくしてアームスティッドは、ここへやってきた用件をきり出したのだから。彼はこれまでにすでに二回も、その話をするために、荷馬車に乗って五マイルの道をやってきて、彼のような人間特有の時間の観念のない、のんびりした、

もってまわった言い方で、ウインターボタムの厩の日かげになった壁の下に三時間もしゃがんで、つばをとばしていたのだった。それというのも、ウインターボタムが売れたがっている耕土機の値段を、ウインターボタムにしゃべらせたかったからなのである。ついに、アームステッドは沈みかけた太陽を見ながら、自分が三晩前に床の中で申し出ようと決心した値段を口にした。そして、「おらはその値段で買えるのがジェファソンにあるのを、知ってるだが」といった。

「なら、そいつを買ったほうがいいだ」とウインターボタムがいった。「それで買えりゃあ、まったくの買いどくだな」

「そうすると」とアームステッドはいった。彼はつばをはいいた。そしてもう一度太陽を見て、立ち上がった。「じゃあ、そろそろ家にもどるとしべえか」

アームステッドは荷馬車に乗りこんで、らばを起こした。ということとは、らばを動かすはじめたということなのだ。なぜなら、らばが寝ているか起きているかは、黒人にしかわからないのだから。ウインターボタムは柵のところまでアームステッドを送って行き、その一ばん上の手すりに腕をおいた。「そうともよ」と彼はいった。「あの耕土機がその値段なら、おらだってきつと買うだよ。もしおまえさんが買わねえなら、おらがいつでもそ

れを買うだよ。ところで、それを持っている人のところにゃあ、五ドルばかりで売ってくれる一番のらばはいねえだろうな、どうだい？」

「そうともさ」とアームステッドはいった。彼は車を動かした。と荷馬車はゆっくりした、一マイル四方まで聞こえるようながらがらいう音をたてはじめる。彼もうしろをふり返らない。どうやら、前も見えていないようである。なぜなら、馬車がほとんど丘の頂上に着きそうになるまで、彼は道のはしの溝に腰かけているさっきの娘に気がつかなかったのだから。その青い服をみとめた瞬間、彼には娘が馬車に気づいているのかどうかかわらなかった。また、彼のほうでも娘に目をとめたのかどうか、だれにもわからなかっただろう。二人のどちらもすこしも進んでいるようには見えずに、馬車がねむけと赤いほこりをゆっくりと、だがまるで手にふれることができるようにあたりに振りまきながら、気味悪い様子で娘のほうにはいよるにつれて、二人は徐々に接近して行ったのだから。しかもらばたちは、そのねむけと赤いほこりの立ちこめるなかを、まるで夢でも見ているようにゆっくりゆっくり歩み、そのあい間あい間にチリンチリンという馬具の音をかすかにならし、野うさぎのように長いその耳をしなやかにびくびく動かし、そして彼が車をとめたときでさえ、らばたちはあいかわらず眠っている

とも目ざめているともしれなかったのだから。

今では洗濯のさいの石けんと水ばかりでなく、雨や風にさらされて、すっかり色があせてしまった青い日除け帽の下から、娘はそっとうれしそうに彼のほうを見あげた。それは若々しい、気持ちよさそうな、あけすけな、親しみやすい、用心深そうな顔だった。だが、彼女はまだ動こうとはしない。帽子とおなじく、雨風にさらされて青色のあせてしまった服につつまれた彼女のからだは、形がくずれて、動かずにいる。うちわと包みがその膝におかれてある。娘は靴下をはいていない。そのむき出しの足が、浅い溝のなかにならんで投げだされている。そしてその足のそばに、ほこりだらけな、重そうな、男ものみたいな靴がおかれてあるのだが、その靴さえも足におとらずぐったりしているように見える。アームステッドはとまった馬車の中に、背をさるめ、うつろな目で、すわっている。彼はうちわの縁が帽子や服とおなじようなあせた青色にきれいに縁取られているのに気づく。

「おまえさんはどこまで行きなされるだね？」と彼はいう。

「暗くならないうちに、この道をもうすこし行こうと思っていたの」と娘はいう。彼女は立ちあがって、靴を手にする。そしてゆっくりと慎重に道のほうへ登って行っ

て、馬車に近づく。アームステッドはわざわざおりて彼女に手をかそうとはしない。彼はただ、彼女が重そうに車輪の上を越えて中に乗りこみ、座席の下に靴をおくあいだ、らばたちを動かぬようにおさえているだけだ。それから馬車が動きます。「すいません」と娘はいう。「歩くのって、まったくくたびれるもんね」

アームステッドはこれまで一度も彼女をまともに見ていないようだった。にもかかわらず、彼は彼女が結婚指輪をはめていないのにすでに気づいていた。彼はまだ彼女のほうを見ようとはしない。馬車がふたたび、あのゆっくりした、がらがらいう音をたてはじめる。「おまえさん、どこからきたんだね？」と彼はいう。

娘はふっと息を吐く。が、それはため息というよりもむしろおだやかな吐息であり、あたかもおだやかな驚きを吐いてでもいるようである。「今から思うと、ずいぶん遠かったわ。あたしはアラバマからやってきたの」

「なに、アラバマからだって？ おまえさん、そのからだでかい？ おまえさんの家族はどこにいるんだね？」

娘もまた彼のほうを見ようとしなない。「あたしはあの人を探しながら、ここまできたんです。もしかしたら、おじさんはあの人を知っているかもしれないわ。あの人の名前はルーカス・バーチっていうの。この向こうで、あの人はジェファソンで、平削工場で働いているって、

教えてもらったの」

「ルーカス・バーチか」と、アームステッドは彼女とそっくりの調子でいう。二人はへこんだ、スプリングのこわれた座席の上にならんで腰掛けている。彼には膝におかれた娘の手と、日除け帽の下の横顔を見ることができる。彼は目のほしに、それを収める。娘は二頭のらばのしなやかな耳の間にひろがってゆく道を眺めているように見える。「それでおまえさんは、ただ一人で、ずっと歩いて、その人を探しながらここまで来たっていうのかい？」

娘は一瞬答えようとしないう。それからやつと口を開く。「みんなが親切にしてくれたわ。とっても親切にしてくれたわ」

「女どももかい？」彼は目のすみで彼女の横顔をうかがいながら マーサガナンテ言イダスカ、オラニャアワカラネエ と考え、ついでこう考える。『マーサがなんて言いだすか、たぶんおらにやあわかつてるだ。女っていうやつはそんなに親切じゃあなくても、人はいいていうことがありがちなんだ。そうだ、男だって、そうかもしれないねえ。その逆に、ほかの女が親切にしてもらいたいと思つてるときに、たいへん親切そうにするのは、性の悪い女にきまつてるんだ』そしてさらに考える ソウトモ、オラニャアワカッテルダ。マーサガナンテ言イダス

カ、チャントワカッテルダ

娘は少し前かがみに、じつと動かずにすわっており、その横顔もまったく動かず、頬もまた動かない。「まったく不思議なことだわ」と彼女はいう。

「おまえさんみたいなかっこうをした若い見ず知らずの娘が道を歩いているのを見たら、だれだって亭主に置いてきばりにされたなんて思うもんかね」娘は相変わらず動かない。その手入れのしてない、いたんだ木材が、のんびりした午後と、道と、熱気と一つにとけあつて、馬車は一種のリズムに乗って進んで行く。「それでおまえさんは、その男をジェファソンで見つけるつもりなんだな」娘は動こうとせず、二頭のらばの耳の間にのぞける、ゆっくり動いて行く道を、おそらく道の形をした無限の距離を、眺めているらしい。「きつと、見つかると思つてるわ。それは、そんなむずかしいことじゃあないわ。あの人はたくさんの方が集まつていて、笑ったりふざけたりしているところにいるにきまつてる。あの人はいつだって、人を笑わせる名人だったんだから」

アームステッドは、粗野で、そっけない音を、ぶつぶつたてる。「はいしー、はいしー」と彼はいう。そして、考えているとしゃべっているともつかぬ様子で、自分に向かつていうのである。『そうだ、見つかるかもしれないねえ。その野郎は、アーカンソーかそれともテキサス

まで行かずに、その手前でとまってしまったのは大失敗だったっていうことを、思い知らされるかもしれねえだ」

太陽は西にかたむき、あと一時間したら地平線の下に沈み、夏の夜が急ぎ足で訪れることだろう。道から小道が分れており、そこは今までよりもっと静かである。

「さあ、ついただよ」とアームスティッドがいう。

娘はすぐからたを動かす。彼女は手を下に伸ばして、靴を見つめる。まるで自分が靴をはくあいだ馬車をおくらせてはならないとも思っているふうに。「ほんとに、すいません」と彼女はいう。「大助かりしたわ」馬車がふたたびとまると、娘はおりの用意をする。

「たとおまえさんが日暮れ前にヴァーナーの店まで行ったとしたって、そこからジェファソンまではまだ十二マイルもあるだ」とアームスティッドがいう。

彼女は片方の手に靴と包みとうちわを、いかにも持ちにくそうに持ち、もう一方の手は馬車をおりるときの用意に、からっぽにしている。「でも、このまま先をつづけたほうがいいと思うわ」と彼女はいう。

アームスティッドは娘のからだに手をふれずに、「いっしょにきて、今晚はおらの家に泊まんな」という。

「うちへ行きやあ女どもが——女が一人いるだから……もしもおまえさんが女手を——さあ、いっしょに行くべえ。あしたの朝一ばんに、おらがおまえさんをヴァーナ

ーの店までつれてってやるだよ。そうすりゃあ、おまえさんは町まで車に乗って行けるだよ。土曜日にゃあ、だれか町に行く者がいるからな。相手の男だって、まさか今晚じゅうに逃げて行っちゃうことはあるめえさ。もしその男がたしかにジェファソンにいるとすりゃあ、あしただってまだいるだよ」

娘はおりようとして、その持ち物を手に持ったまま、じっとすわっている。彼女は前方を、日かげがその上に落ちた道が、曲がりくねって走っているかなたを、見つめている。「だけど、生まれるまでにゃあ、まだ二、三日はあると思うわ」

「そうともよ。まだ時間は十分あらあな。だけどよ、おまえさんはいつなん時、歩けない連ができるかも知れねえだ。おらといっしょにうちへ行くべえ」彼は相手の答えを待たずに、らばを動かしはじめる。馬車はうす暗い小道にはいつて行く。娘は背をうしろにもたれさせてすわっているが、まだその手にはうちわと、包みと、靴がにぎられている。

「あたしは他人さまの世話にはなりたくないの」と彼女はいう。「迷惑をかけたかないでさ」

「なんの、なんの」とアームスティッドはいう。「おらといっしょにくるがいい」今はじめて、らばたちはひとりでせっせと進み出す。「とうもろこしの匂いをかぎつ

「けやがっただ」とアームスティッドはいい、それから考
える。『だけど、ここで問題なのは女だて。ほかならぬ
女自身が、まずまっ先に、自分と同じ女を困らせようと
するんだから。この娘がべつに恥ずかしいとも思わずに
一人で人前を歩いて行けるのも、世間の連中が、男たち
が、親切にしてくれるだろうと思っているからだ。この
娘は女どものことなんか、ぜんぜん気にかけちゃあいね
えんだ。どんな女だって、この娘を困ったなんていう目
に合わせることはできやあしなかっただ。そうともよ。
女の一人を結婚させるか、それとも結婚させなくても困
った目にあわせてみる。そうすりゃあすぐに、その女は
女という人種からわかれてしまつて、残りの生涯を男と
いう人種の仲間入りをしようとしながら送るようになる
だらうて。女どもが嗅ぎたばこをちよつと嗅ぎたがった
り、たばこをふかしたり、参政権を持ちたがったりする
のは、そのためなんだ』

馬車が家の前を通り過ぎて、厩^{うまや}のほうへ進んで行くとき、アームスティッドの女房が表のドアからそれをなが
めている。彼はそのほうを見むきもしない。わざわざそ
っちを見なくとも、女房がそこにいるだらうと、いや必
ずいるにちがいないと、わかっているのだ。『そうよ』
と彼は、らばたちを開いている圍いの門の中に入れないが
ら、あざけるような後悔の情にかられながら考える。

『あれがなんて言いだすか、おらにやあちゃんとわかっ
てるだ。ちゃんとわかっているともよ』彼は馬車を止め
る。彼にはわざわざ見なくとも、女房がいま台所にいて、
もうこつちを見ておらず、ただ待っているのがわかつて
いる。彼は馬車を止め、「おまえさんは家へはいんな」
という。彼はすでに下においていたが、娘はあの心の声
にじつと耳を傾けているような慎重な様子で、今ゆっく
りと車からおりるところである。「だれかに会つたら、そ
いつは女房のマーサだな。おらは家畜どもに餌をくれて
から、中へはいるからな」彼は娘が圍い地を越えて、台
所のほうへ歩いて行くのを見ていない。彼にはその必要
はないのである。彼の心は一步一步彼女についてゆき、
彼女といっしょに台所のドアをくぐり、馬車の過ぎて行
くのを表のドアからながめていたと同じぐらいのたしか
さで、いま台所のドアをながめているにちがいない女房
に出あうのだ。『おらにやあ、あいつがなんて言いだす
か、ちゃんとわかっているだ』と彼は思う。

アームスティッドはらばたちを馬車からはずして水を
飲ませ、厩に入れ、餌を与える。それから牝牛たちを牧
場から中に入れる。それから台所へ行くのである。女房
はまだそこにいる。それは冷たい、ごつごつした、癪^{かんしゃく}
持らしい顔をしたごま塩髪の女で、彼女は六年間に五
人の子供を生み、その子たちをおとなに育てあげてき